

蒼 穹 の 天

野口 信彦

チベット高原は標高 4000 年から 5000 メートルの高地にある。そのチベット高原は冬になるとマイナス 20 度から 30 度以上もの極寒の地となる。その冬の厳しさは、私たちの想像を絶する。

日本は四季に恵まれた温暖の国であるが、中国の周縁・チベット高原はほとんどが短い夏と長く暗い冬である。それだけに、あっという間の春がすぎ、そして夏が来ると、人びとは全身を夏の太陽に染み込ませようとする。しかし、その夏もまた短い。

数年前の夏のある日、ラサからランドクルーザーでチベット西端の聖山カイラスをめざした。チベット民族はもちろん、ネパールやインドからもこの聖なる山を目指して巡礼にやってくる。ここでの宗教はチベット仏教、ヒンディー教や土着のボン密教、ジャイナ教などがある。

彼らは短くても数ヶ月間かけて、聖なる山・カイラスにやってくる。信仰心が篤い人は数年かけて五体投地を繰り返したら、気の遠くなるような距離を気の遠くなるほどの五体投地の回数を重ねてやってくる。この信仰心の篤さはどこからやってくるのだろう。

ある場所で私たちの数台の車が河にスタックして身動きが取れなくなった。さっそく、近くにいた子どもたちが女性教師と連れだって、わたしたちと車とを見学に来てきた。その子どもたちと互いにつたない漢語で話し合った。はじめは恥ずかしがって逃げ出すが、やがてひとり子どもがはにかみながらわたしと話し始めると“ボクもわたしも”とワツとばかりに集まって口々に話しはじめる。「学校は面白いかい?」「うん、友だちがいるから面白いよ」「どんな勉強をしているんだい?」「漢語も勉強するけれど、親からはチベットの誇りと言葉を忘れたらチベット民族じゃなくなるって言われるから、一生懸命チベット語を勉強しているよ」とこたえる。チベット民族が“自分の民族の言葉を勉強する”。これが現在のチベットの現状なのである。しかも学校に行ける子どもたちは、ほんのわずかである。

若い女性の教師も、少ない教材で苦労しながらチベット語を教えていると話してくれる。いま、チベットでは、小学校 2～3 年生から漢語の授業が始まり、小学校をおえたとすべて漢語の授業になるという。その後の進学・入学試験や就職試験もすべて漢語なので、勉強せざるを得なくなっている。

標高 4500 メートルのチベット高原の、あまりにも蒼い空は、天に近いめか、青黒くみえる。一望すると 50 キロ四方が見渡せるほどの高原である。南にはムスタンかドルポあたりのヒマラヤの山なみが見え、西には真っ黒な雷雲が沸き立ち、その下からは稲光が美しく光っていた。

正月のいまでも、あの子どもたちは極寒のなかで元気に遊んでいることだろう。

(2000 年 1 月 1 日 「日中友好新聞元旦号一面に写真とともに掲載した文章」)

